



「近くにおられる神」

申命記4・1-12 (要旨) 説教者 原田憲夫

今月から旧約聖書「申命記」を読みます。書全体を通じての「鍵の語キーワード」は「真実の神」です。申命記第4章はモーセによる説教の部分で、この書全体の要約といえます。イスラエルの民は荒野の旅を終えようとしています。「約束の地」を目前にして、モーセは自分を通して伝えられた神の義-民に約束された神の祝福-を確かにするために、主の掟と定めに従順に従い守るようにと勧めます。本日の箇所では「今」に注目してみことばに耳を傾けます。

序

最近頂いた一つのお便りに繰り返されていた「よくわからない内に・・・」の文言。自分たちの意志や思考とはまるで別の次元で動いている、そういう実感/思いが伝わってきました。どこへ行こうとしているのか・・・

[1] 現在-「今、イスラエルよ、....」(1)

「約束の地」を目の前にしたイスラエルの民は、過去と未来の分岐点-「今」に立っているのです。

しかしそれは、過去を無視した刹那的な意味での「今」ではなく、過去とつながり、そして「未来」としっかりつながっていく「今」なのです。

それはまた、「今日」という人生のかけがえのない一日を迎えている私たち、そしてその中には明日から進学、就職、結婚、退職といった人生の大きな節目を迎える方々にも語られているのです。

▷「今、主のみことばを聴き、それぞれの人生を何のために、そしていかに用いるのか、このことを歴史に働かれる神に祈ろう！」

[2] 過去-「あなたがたの神、【主】にすぎってきたあなたがたはみな、今日生きている」(4)

モーセは過去を振り返る中で、誘惑に負け、イスラエルの群れから脱落していった人々のことを語ります(3)。民25章参照。

しかし対照的に、荒野の長い旅の最中、厳しく、苦しい状況の中で、「【主】にすぎってきたあなたがたはみな、今日生きている」との一言は、もの凄く重く、そして勇気づけられる一言です。

キリスト信者にとって「【主】にすぎってきた」とは、どんなときにも主イエス・キリストを信じ従ってきたということです。

けれどもそれは、強く、過ちのない「私」が、ということではありません。

▷「【主】にすぎってきた」…この表現には見栄も外聞も無い、ありのままの「私」の姿が見えます。そんな「私」が【主】に必死につかまってきた結果、「今日生きている」というのです。

▶【主】にすぎるのを妨げるもの；

†一つは、自尊心。

自分は誰にも頼らない、頼れるのは自分だけだ。
†もう一つは、自虐心(無価値感、被害意識)。
自分はダメな奴だ。また嫌な記憶が前進を阻む。
▷これらは謂わば「心のもつれ」です。

「心のもつれ」をほぐすには、「ありのままの私の姿」を主イエスに対して隠さないことです。「主よ、信じます」と決心した時、「私」という部屋の中に主イエスを招き入れたのではなかったでしょうか？

「主よ。ここは私が〇〇の時に苦しんでいた部屋です。ここが同僚を傷つけた嫌な場所です。

主よ。ここは結婚して・・・」

▷【主】に必死にすがって、今日生きよう！

[3] 未来-「あなたの子どもや孫たちに知らせなさい」(9b)

モーセは未来に向けて語ります。そしてそのための心構えとして、「・・・よく気をつけ、十分に用心し、あなたが自分の目を見たことを忘れず、一生の間それらがあなたの心から離れることのないようにしなさい。」(9a)と勧めるのです。

▷私たちも同じです。かつて私たち-あなたが頂いた「ゆるしの体験-十字架に現れた神の愛」をしっかりと心に刻み、忘れないことです。

今、どこへ行こうとしているのかわからなくなるとき、いつも私たちの近くにおられる十字架の主-神を思い起こすことです。主は私にとってどのようなお方か、「私の歴史」に向き合うことです。

●結び

「まことに、私たちの神、【主】は私たちが呼び求めるとき、いつも近くにおられる。このような神を持つ偉大な国民がどこにあるだろうか。」(7) →アウグスティヌス；「私は自分に近いのだが、神はそれよりもずっと私に近くおいでになる。」

▷さあ今、あなたの近くにおられる神、主の恵みによって今日まで生かされてきた日々-過去をしっかり振り返り、あなたに用意されている新しい未来、その使命をしっかり見据えて歩もう！

(祈り) 哀歌3・19-24

(賛美) 教会福音讃美歌 434 番